の感を蒙り、化道の心深して震旦国渡て、真言の大法を弘めたり。一印・一真言を結び誦すれば、過去現在の無量の罪滅ぬ覧。何の科に依て閻魔の責をば蒙給ける哉覧。不審〈極り無し〉。善無畏三蔵、真言の力を以て閻魔の責を〈脱れずば〉、天竺・震旦・日本等の諸国の真言師、地獄の苦を〈脱るべきや〉。委細に此事を勘たるに、此三蔵は世間の軽罪身〈御せず〉。諸宗並真言の力にて滅ぬ覧。此責別の故無し。法華経謗誹の罪也。大日経の義釈を見に、〈「此の経は是れ法王の秘宝、妄りに卑賤の人に示さず。釈迦出世の四十余年に舎利弗慇懃の三請に因りて方に為に略して妙法蓮華の義を説くが如し。今此の本地の身又是れ妙法蓮華最深秘処なり。故に寿量品に云く、常に霊鷲山、及び余の諸の住処に在り、乃至、我が浄土は毀れざるに、而も衆は焼け尽くと見ると。即ち此の宗瑜伽之意なるのみ。又補処の菩薩の慇懃の三請に因て、方に為に之を説く〉等云云。此釈心は大日経に本迹二門、開三顕一・開近顕遠の法門有り。法華経の本迹二門の如し。此法門は法華経に同けれども、此大日経に印と真言と相加わりて三密相応せり。法華経は但意密許にて身・口の二密闕たれば、法華経をば略説と云ひ、大日経をば広説と〈申すべきなり〉と〈書かれ〉たり。此法門第一の悞謗法の根本也。此文に二の悞有り。又義釈云、〈「此の経横に一切の仏教を統ぶ」〉等云云。大日経は当分随他意之経也、悞て随自意跨節之経と思えり。かたがた悞たるを実義と思食故に、閻魔の責をば蒙たりしか。智者にて御座せし故に、此謗法を悔還て法華経に翻し故に、此責を〈免るるか〉。天台大師釈云、〈「法華は衆経を総括す。乃至、軽慢止まざれば舌口中に爛る」〉等云云。妙楽大師云、〈「已今当の妙、此に於て固く迷う。舌爛止まざるは猶華報と為

す。謗法の罪、苦長劫に流る〉等云云。天台・妙楽の心は、法華経に勝たる経有りと云はむ人者、無間地獄に〈堕つべし〉と〈書かれたり〉。善無畏三蔵は〈法華経と大日経と〉は理は同けれども事の印・真言は勝たりと書れたり。然に二人中に一人者必悪道に〈堕つべし〉とをぼふる処に、天台の釈は経文に分明也。善無畏の釈者経文に其証拠〈見えず〉。其上閻魔王の責の時、我内証 肝心とを[3]ぼしめす大日経等の三部経の内の文を誦せず。法花経の文を誦して此責をまぬかれぬ。疑なく法花経に真言まさりともう悞をひるかへしたるなり。△

其上善無畏三蔵の御弟子不空三蔵の法華経の儀軌には、大日経・金剛頂経の両部大日をば左右に立、[4]法花経多宝仏をば不二の大日と定て、両部の大日をば左右の臣下のごとくせり。伝教大師は延暦二十三年の御入唐、▽霊感寺順 暁和尚に真言三部の秘法を伝、仏滝寺の行満座主に天台の宝珠をうけとり、顕密二道の奥旨をきわめ給たる人。華厳・三論・法相・律宗の人人の自宗我慢の辺執を倒して、天台大師に帰入せる由をかゝせ給て候。△依憑集・守護章・秀句なむど申書の中に、善無畏・金剛智・不空等は天台宗に帰入して智者大師を本師と仰由のせられたり。各各思えらく、宗を立つる法は自宗をほめて他宗を嫌は常の習也と思えり。法然なむどは又此例を引て、曇鸞難易・道綽 聖道浄土・善導が正雑二行の名目を引て、天台・真言等の大法を念仏の方便と成せり。此等は牛跡に大海を入、県の額を州に打者也。世間の法には下剋上・背上向下国土亡乱の因縁也。仏法には権小の経経を本として実経をあなづる、大謗法の因縁也。〈恐るべし恐るべし〉。嘉祥寺の吉蔵大師は三論宗の元祖、或時は一代聖教を